

県考古学会への独り言

明 石 新

平成2年の秋頃、神奈川考古学同人会を母体として、県内の民間団体、研究団体、大学関係者、市町村関係者を発起人として、新たな「神奈川県考古学会」を樹立する動きがあった。当時、何々県考古学会と称する団体は考古学に携わる研究者中心の学会が多い中で、何回かの検討準備会が実施され、やっと、平成3年4月に発会式となった。今年で13年目を迎え、この間の活動は他県の考古学会と遜色なく、ある意味では超えている活動を行ってきたと思う。思うが果たして、当初の基本理念であったことが、傍らに置かれ、何を目指しているのか少々見えにくくなり、会員の一人として、独り言・迷い言を吐露したくなった。

本考古学会の会員数は全国の研究団体の会員数と比較しても、極めて多くの会員によって維持されている。とりわけ、職業としないで一人で考古学を楽しみ、学んでいる人（一般人と呼んでいる）が会員全体の多数を占めているのが、本考古学会の最大の特長である。それは会則の第2条に盛られているように、楽しみながら勉強している人と専門とする人とがお互いに交流・接触しあうことによって、より質の高い学会へと昇華することを願ってのことである。この基本理念を如何に会員とともに共有し、特色ある事業を展開するかが、今の学会に求められているのではないかと考えている。

というのも、現在の事業内容は多少の変化はあるものの、今後の展望として、金太郎飴のような状況に陥るのではないかと危ぶむからである。幹

事役員の方々が無報酬で鋭意努力されていることは重々承知しているが、学会が発足してから、県内の市町村単位での普及事業も多岐多様に渡り展開されている中で、本会の特長を最大限に生かす方法を模索する段階に来ていると考えている。

そうした状況の中で、学会が進むべき方向性はあるのだろうか。あるとしたらどのような具体案が考えられるだろうか。先ず第一に、事業内容の見直しを提言したい。つまり、会員が求めているものは何であるかを的確に把握すること。その一つの方法としてアンケート調査を実施し、分析し、会員の総意による事業の再構築を検討すべきであろう。第二に役員の人選について。少なくとも現在の体制は専門とする人たちが優先されている。この会の特長である専門以外の人を積極的に吸い上げて構成するのも新たな道と考えたい。第三に『考古論叢』・講座・発表会の出版物は総て無料化の方針を検討したい。会費の上出版物に代金を払うのは、二重払いとなり、納得されない会員が相当数いると考えている。第四に『考古論叢』の内容及び発行形態の再検討である。その検討の中で、本誌「考古かながわ」を『論叢』に吸収し、会員の生の声を載せる頁として、新たに位置づけることも可能である。

敢えて、苦言を呈する形になったが、「会員の、会員による、会員のための学会」であることを再認識し、学会の事業を改めて見直すきっかけとなれば、幸いである。

平成15年度考古学入門講座

「考古から近世・近代へのアプローチ —神奈川県内の遺跡を中心に—」 開催される

本年度の講座は、さる3月7日（日）かながわ県民センター2階ホールにて開催いたしました。今回は近世・近代をテーマに、県内の事例報告を8、紙上発表1の計9本と総括、特別講演は江戸研究第一人者の堀内秀樹先生（東京大学埋蔵文化財調査室）を講師にお招きしました。講座では時代設定に近世・近代を扱うのは初めてです。加えて近代は研究の歴史が浅いため、皆さんに参加してもらえるのかと危惧していました。が、最終的に参加者は約110名を数えました。

近世の神奈川というと、小田原城や東海道の宿場などが思い浮かぶのではないのでしょうか。県下の発掘調査では小田原城郭や武家屋敷が早くから報告されていました。1990年以降になると近世遺跡の報告例も一気に増え、範囲も県内全域に拡大してゆき、集落や墓地、水田など多様になりました。近代はどうかというはまだ緒についたばかりですが、横浜の近代化遺跡や横須賀の陸海軍施設遺跡が新聞報道されるようになってきており、調査事例もこれから増えていくことでしょう。

このように、近世・近代の考古学研究が近年拡大していく背景には、「物」を対象とする考古学の方法・手段が時代に関わりなく有効であることが挙げられます。今回の講座もこのことを県内の事例から検討するため企画いたしました。

特別講演は「都市江戸の発掘調査」を講演いただきました。堀内先生は県内外で活発に活動しておられ、今回の講座も先生の講演目的に参加された方もいらしたのではないのでしょうか。講演は江戸・陶磁器・加賀藩邸調査と盛りだくさんのお話を聞くことができました。

事例報告は大坪宣雄さんの主旨説明で始まり、続いて諏訪間順さんに「近世小田原宿一焼継ぎさ

れた陶磁器と飯盛女のかんざし」で、町屋風景の考古学的検討についてお話いただきました。中三川昇さんには「向井将監正方夫妻の墓」の詳細な観察と実測に基づくお話と江戸時代の墓制や今後の近世墓調査の方向を講義いただきました。

「宝永火山灰にかかわる遺構」では、渡辺清史さんが、1707年の噴火が県内に与えた影響を、遺構内への火山灰の放置と復旧の例で示されました。村澤正弘さんには古民家解体に伴う調査例として土木基礎工法を詳細に説明いただきました。

午後は特別講演を挿み、近代事例が発表されました。市川正史さんからは宮ヶ瀬遺跡群と県内の西洋遺物の研究をお話いただきました。カタログからジャムビンと推定した過程は興味深いお話でした。野内秀明さんは東京湾要塞の一部である猿島の都市公園整備に伴う調査にかかわっておられます。東京湾要塞については横須賀の都市発達史上、貴重な遺構であると指摘されました。

藤山龍造さんは第27回神奈川県遺跡調査・研究発表会に引き続き発表をお願いしました。その際には漁村生活の近代化を発表していただきましたが今回はそのバックグラウンドで、関東大震災の存在が大きいことを示唆されました。大坪宣雄さんからは戦争遺跡の問題点として調査者の遺跡認識の差により調査が行われない場合のあることが指摘されました。総括は慶應義塾大学の桜井準也さんをお願いいたしました。近代の考古学研究の役割をまとめていただき、さらに横浜、横須賀、鎌倉、大磯などの近世遺跡の地域を上げ、神奈川県近代遺跡研究の発展に期待すると締めくくられました。また、紙上発表として「横浜の近代遺跡」を坂上克弘さんに執筆いただいています。

閉会后、桜井さんから県内単位で近代というテーマが検討されたのは全国初ではないかと発言がありました。今後とも会員の皆様に最新の生のデータを送り続けたいと思います。

（講座担当 上原正人）

大倉周辺遺跡群見学会に参加して

毛利加代子

2003年11月29日、あいにくの雨模様のなか、晩秋の鎌倉での遺跡見学会に参加しました。いただいた案内状には「～中世都市鎌倉の市街地の中で、弥生時代の集落が検出されている貴重な事例～」とあり、私は「久しぶりの鎌倉！」という観光気分、大勢の熱心な会員の方々に混じって現地に向かいました。

遺跡は杉本寺に向かう金沢街道沿い（滑川右岸）にあり、建て込んだ街なかとしては広い面積で、いきなりボコボコの大きな穴や長い溝が目飛び込んできました。

でも、調査を担当されている齋木さんの説明をうかがううちに、「大倉幕府」推定域の南御門としての位置、中世初期の大規模開発による削平、滑川の流路変更の可能性、平安末期の水田利用、弥生の住居跡と“周溝墓？”の存在・・・といった遺跡のポイントが、臆気ながら理解できるようになりました。

その後、小春日和の12月16日、皆さんが黙々と調査をされている現場を再びお邪魔しました。お忙しい齋木さんから、弥生時代の層が20cm 足らずで住居跡の壁が出てこないことなど、現場を回りながら調査の実際の様子を教えてくださいました。そこかしこに点々と残るオレンジ色の炉跡が印象的でした。また平安末期まで遺跡周辺には碁盤目状の水田が広がっていたことなど、鎌倉中心部の古代の景観が改めて現実的なイメージとして浮かび上がってきました。

注目された“周溝墓？”も、弥生終末期もしくは古墳時代に入るものという見解が示され、“弥生時代の鎌倉”という新しい一面が確かなものになりました。私は、周溝が完全に掘り上がったところをもう一度見学させていただくことをお願いして、現場を失礼しました。

10日後の26日の朝刊で「鎌倉の遺跡群 ガラス製造の痕跡か 13世紀の層で出土」といった記事を目にした私は、喜び勇んで3度目の現場訪問に出かけました。年内最後の記録撮影でお忙しいさなか、瀬田さんから、鶴見大学での分析の結果、ガラス残滓が“ソーダ石灰ガラス”を作成した際に生じた可能性の高いことや、作業後に浅いくぼみに捨てられたらしい検出状況など、詳しい説明をいただきました。

この日は周溝（約10m四方、幅約1m、深さ約60cm）も隅丸？方形に掘り出され、ひときわ目立っていた朱塗りの大きな壺も、その姿を露わにしていました。溝も遺物も、千数百年前の時空間のなか、人々が確かにここに存在した！ということを強烈に物語っていました。

今回は現場に3度足を運んだことで、興味本位・受身になりがちだった自分の見学姿勢を考え直すきっかけにもなり、また、現場でご苦労なさっている方々の姿、その熱い思いなども、私なりに感じ取ることができたように思います。貴重なお時間を割いてご親切に説明して下さった齋木さん・瀬田さんに心からお礼申し上げます。

房総の古墳を訪ねて

小松良子

古代の人々が現代の我々に遺してくれた尊い遺跡の見学は、その度に新しい感動を覚えて衿を正す。

遺跡の前に立ち、現在目にしている風景や姿を消し、その空間に古代の山や、木や、草原、人の動きをイメージしてみると、巨石を運び、土を掘り運び上げ、目的の形に仕上げてゆく。その過程には現代の機械のない当時どれほど大変なことだったか。労力にかりだされた人々が身にまとっていた繊維製品は草木から採り、又既に綿を栽培していたかも知れないし、生糸もあつたかも知れないが、全ての人々にゆきわたるほど多量の生産は無

理だったろう。古墳出土の豊富な遺物を見れば、そうではなくもっと豊かな暮らしだったのかも知れないが…。多くのハニワの穏やかな顔、繊細な細工の施された金の鈴を見れば、もう相当に文化は進んでいたのだろうかとも思う。

海に近く、魚貝類等の食料も豊富だったであろう房総の地に見る古代。金鈴塚古墳、芝山古墳群、竜角寺古墳群。残念に思ったのは、金鈴塚古墳出土の17振りもの大小の太刀について象嵌銘文の有無が調べられていない。ということで、そのことはとても残念だった。なんとか、是非調べてもらいたいものと思った。

穏やかな早春の陽を浴びながら、感銘深い一日を送らせていただいたことに感謝！！

房総の古墳をめぐる見学会に参加して

白 勢 順 子

平成16年2月7日（土）、房総の古墳をバスでまわる見学会が行なわれました。バスの中では横須賀市自然・人文博物館の稲村 繁先生の解説を伺い、その後で実際に金鈴塚古墳遺物保存館、芝山はにわ博物館、房総風土記の丘に行き、展示してあるものを稲村先生の詳しい解説付きで見ることができるといふ、とてもぜいたくな見学会（いつもながらのことではありますが…）が、今回も行なわれました。

横浜駅西口に朝の7時40分集合ということで、到着時間に間に合うように早起きをして、準備するのが大変でしたが、東京湾に浮かぶ“海ほたる”に到着し、あたりをぐるっと見回した時には、すばらしい一日が始まる予感がして、ワクワクとはずむ気持ちで一杯になりました。とても良い天気にも恵まれたので、海の真中の海ほたるからは、思ったより近いところに富士山が見え、私の住んでいる三浦半島との位置関係がよく分かりました。

三浦半島からいつも見なれている房総半島は、

こんもりとした山々というイメージでしたが、実際に車で走ってみると全く逆で、どこまでも平らな平べったい地形なので驚きました。また、こんなにたくさんの古墳があるなんて（知らなかったことが恥ずかしいのですが…）とても驚きました。

バスの中での稲村先生のお話はとてもわかりやすく、そして、その後展示されている実物を見ながらの先生のお話もとても興味深いものでした。先生のそばにいけたらしめたもので、まるで言葉が溢れ出すように次々と説明をしていただくことができたので、とても勉強になりました。埴輪の話じっくり伺う時間がなく、もっと時間があれば…と少し残念にも思います。しかし、資料館などを3つも見学することができた上に、目の前にあるものについての説明を直接稲村先生にさせていただいたので大満足です。稲村先生、ありがとうございました。初めて見学会に参加した友人達はとても喜んで、見学も終わりがけた頃には先生の言葉を聞き逃すまいと、先生の横にぴったりとついて真剣な顔をしていました。バスの中で房総風土記の丘の敷地内や周辺にある竜角寺古墳群には、100基を越す数の古墳があると聞き、その数の多さに驚き、実際にその古墳のある場所を自分の足で歩いてみて、横須賀の小学校で先生をしている中谷美子さんは古代の人々の存在をさらに身近に感じたようでした。学校の教室で、中谷さんが古墳を見てきた話をうれしそうに子供達にしている様子が目に浮かびます。今度はもう一度、ゆっくりと自分達で行ってみようと思います。

今回、見学会を計画してくださった皆様、狭い坂道をさすがプロだなと感心させる巧みなハンドルさばきで、私達を安全に目的地まで運んでくださった運転手さん、色々と気を配り私達の快適な旅の手助けをしてくださった添乗員の小川さん、そしてご一緒に一日を過ごした皆様、ありがとうございました。楽しく学ぶことができましたし、思い出に残るとてもすばらしい一日になりました。

伊勢原三之宮いにしえ散歩

伊勢原市教育委員会 井出 智之

伊勢原市は相模川の右岸、市域の北東に位置する大山からなだらかに広がる扇状台地上に立地し、周辺は人口20万を超える都市に囲まれた小さな市です。

交通網は、昭和2年開通の小田急小田原線伊勢原駅で、市内の交通手段はバスのみというのどかな町です。それを示すように、伊勢原市のイメージアンケートでも「緑が多い」、「自然がある」などの回答が多く見られます。

伊勢原の歴史を振り返ると、縄文、古墳時代の遺跡が多く存在することに気づきます。また中世には史跡岡崎城の城主岡崎氏や糟屋氏、石田氏、善波氏など鎌倉幕府を支える人物を多く輩出し、室町時代には太田道灌や関東管領上杉定正が館を構えたといわれ、江戸時代には「大山詣」で賑わうなど時代毎に特徴が挙げられます。

伊勢原市の遺跡で特徴的な古墳は、市域の西側、三ノ宮地区周辺にらちめん古墳、登尾山古墳、尾根山古墳、上栗原横穴墓、下尾崎横穴墓が所在し、北側の日向地区周辺に日向・渋田古墳、日向・西新田原古墳三畝塚古墳が存在します。また東側には高森・赤坂古墳、横穴北高森3号墳、石田車塚、小金塚古墳など市域の外周を取り囲むように古墳群や横穴墓が展開しています。特に三ノ宮地区では古墳から金銅製の馬具が出土し、横穴墓には石積みがなされ古墳と同様の副葬品が出土するなど注目されます。また、緑豊かな伊勢原の雰囲気をよく残した環境が保たれ、古墳所在地からの眺めも良く、古墳立地条件の一因を感じさせてくれるおすすめのエリアです。今回はこの三ノ宮地区の古墳を中心にご紹介していきたいと思います。スタート地点は、比々多神社です。

1 三ノ宮比々多神社

三ノ宮比々多神社は平安時代の延長5年(927)に完成した「延喜式」に記載された式内社で、祭

神は国土創造の神「豊斟野尊」、酒造りの神「酒解神」、玉造りの神「天櫛明玉命」、
「稚日女命」、「大山祇命」が合祀されています。

当社には平安時代の須恵器の甕で雨乞いや酒祭りに使われる県指定の「うずらみか」、持統天皇5年(691)に相模国司布施朝臣色布知によって社殿改修時に奉納された木造の「こま犬」(市指定)が伝わっています。また、併設している「郷土博物館」には周辺から発見された考古資料が数多く納められており、特に「らちめん古墳」や「登尾山古墳」の出土品は一見の価値があります。

境内には「三ノ宮3号墳」と「下谷戸縄文遺跡環状列石及び住居跡」が復元保存されています。

2 化粧塚

道路脇にぽっかりと見える高まりが「化粧塚」で、周辺の田畑で点在する数個の石積み状況などから、古墳の残存形態の1つと考えられています。

名前の由来は、5月5日に大磯町の神揃山で行なわれる「国府祭」に三ノ宮の御輿が出かけるときにこの塚の上で神官が衣冠束帯を旅装に替えたことによります。

3 登尾山古墳

昭和35年に農道工事中に発見された横穴式石室の古墳で、墳形は明確ではありません。出土品は金銅製馬具、直刀、鉄鏃、刀子、銅鏡、銅鏡、玉類、埴輪、須恵器、土師器で一括して市指定重要文化財になっており、先の比々多神社の郷土博物館に展示されています。

古墳の現状は、雑木林の中にひっそりと存在し、石室の石が露呈しています。すぐ隣には古墳の石碑があります。また古墳は丘陵の中腹にあり、そこからの眺めは市街地はもとより秦野、平塚、海老名、寒川、茅ヶ崎、藤沢(江ノ島)までが一望できる絶景スポットで、首長気分が満喫できます。

4 御所神塚古墳

畑の中にある小さな古墳です。古墳の上には小さな祠があり、まわりに一抱えもある石があることから、石室部分のみが塚状に残ったものと考え

られます。地元では昔から「ミソガミヅカ」と呼ばれ、味噌を仕込むときにお参りすればいい味噌ができると信じられてきました。

5 三ノ宮・上栗原遺跡（横穴墓）

平成5年に道路工事に伴い発掘調査が行われ、15基の横穴墓を確認しています。その内12基を調査し、馬具の「轡くつわ」、「かこ」、「壺つぼ」、金銅製の耳環などが出土しています。現在は、コンクリートブロックの擁壁で覆われています。

6 らちめん古墳

恵泉女学園短期大学構内に存在し、昭和43年に同校の建設工事の際発見され、石室内から大量の遺物が出土しました。石室は大学の配慮によりそのままの状態で保存されています。また近年建物の建て替え工事に伴い、三ノ宮・宮ノ上遺跡として周辺の発掘調査が行われ、石室の東から北側にかけて確認された周溝から墳形が直径40mの円墳であることがわかりました。また、この周溝の外側にはもう1本の溝が周っており、この溝を含めると90mの大型円墳になる可能性もあります。出土品は、銀装太刀の一部、銅鏡、鉄鏃、そして、馬具の金銅製鞍くらの一部、金銅製杏葉ぎょうようなどで、一括して市指定重要文化財になっています。これらの資料も比々多神社の郷土博物館でご覧いただけます。

7 三ノ宮・下尾崎遺跡（横穴墓）

恵泉女学園短期大学のある丘陵の西斜面に存在し、土取り工事の際に26基の横穴墓が発見され、平成元年から6年まで断続的に合計17基が調査されました。その結果、この横穴墓群は7世紀から8世紀初頭まで営まれていたことがわかりました。出土遺物は非常に豊富で、太刀、鉄族、刀子、輪鏡、かこ、勾玉、管玉、切子玉、ガラス玉、須恵器、土師器などで、輪鏡については現在のところ全国で3例しか発見されていない大変貴重なものです。また、須恵器の多くは浜名湖の西側に位置する湖西の窯で焼かれたものです。遺跡は現在も調査時の崖のままになっています。

8 三ノ宮・前畑遺跡

この遺跡は、恵泉女学園短期大学の研修棟建設に伴い発掘調査が行われました。その結果、縄文から古墳時代までの集落址、土抗、古墳などを確認しました。中でも弥生時代後期の住居跡から、静岡県得天竜川左岸に分布する「菊川式」と呼ばれる土器がまとまって出土しており、この時期菊川周辺地域の人々との交流が考えられます。

9 松山古墳

畑の中にこんもりとした墳丘が見られる、直径30mの円墳です。まだ未調査のため古墳の副葬品などはわかりませんが、周りの畑の耕作物がなくなる冬場には、畑の中にうっすらと黒い帯が確認でき、周溝の様子がわかります。

10 三ノ宮・下谷戸遺跡

この遺跡は、2回に渡り調査が行われています。1度目は東名高速道路建設時で、発見された古墳と環状列石は三ノ宮比々多神社の境内に復元保存されています。2度目は、東名高速の拡幅に伴い、平成4年から7年までかながわ考古学財団によって行われた調査で、旧石器時代から近世までの遺構が確認されています。

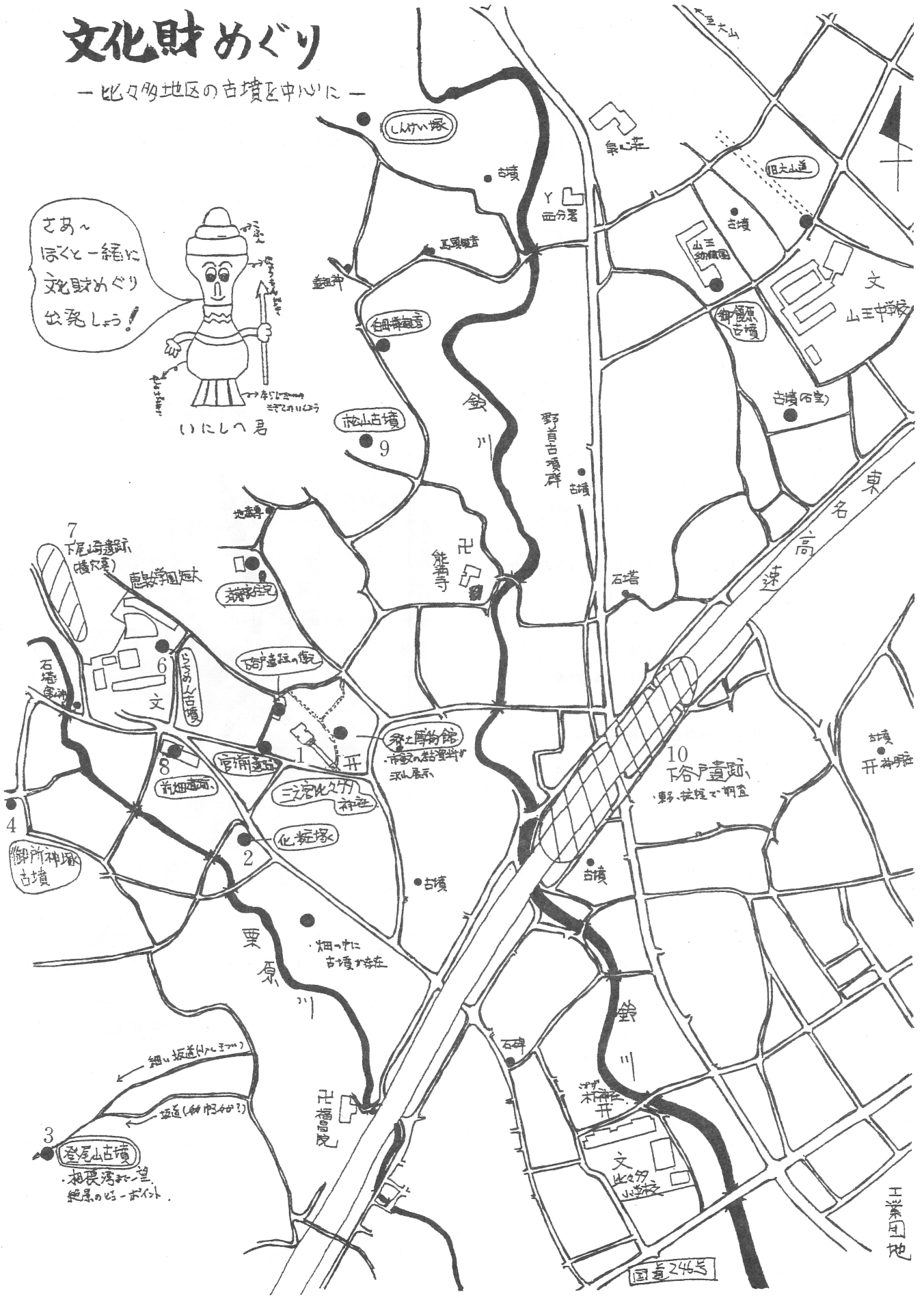
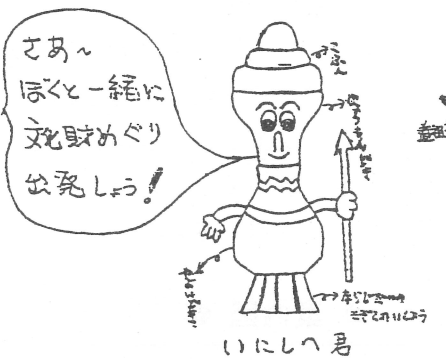
旧石器時代は細石刃の製作途中を示す黒曜石が多く出土していることから工房址の可能性が考えられます。縄文時代は敷石住居が確認されています。古墳時代は後期の群集墳として8基の古墳が確認され、3号墳の周溝からは丁寧に埋葬された若い馬の骨が1頭分出土していることから、周辺の古墳や横穴墓で多く出土する馬具類と合わせ、馬との密接な関係を示す資料として貴重です。

市内には三ノ宮地区以外にも多くの文化財が遺されています。それらはまたの機会にご紹介するとして、これからの季節伊勢原市のいにしえ散歩にお出かけになって見ませんか。きっと皆さん歴史に対しての新たな興味が湧いてくると思いますよ。

（紹介した遺跡の番号は、イラスト地図に対応します。）

文化財めぐり

— 比々多地区の古墳を中心に —



2004年1～3月の催し物情報

【展示会】

○春季企画展「相模原の石仏～石仏が伝える地域の歴史～」

会期：2004年3月20日（土・祝）～5月23日（日）

会場：相模原市立博物館

【記念講演会】

「石仏調査から分かること」

日時：4月18日（日） 14：00～16：00

講師：小川直之（國學院大學教授）

「相模原の石仏調査」（第25回日曜講演会）

日時：5月23日（日） 14：00～16：00

講師：加藤隆志（当館学芸員）

会場：当館・大会議室

定員：先着200名

問い合わせ：相模原市立博物館

（相模原市高根3-1-15 電話：042-750-8030）

○特別展「浮世絵 江戸名所七変化一丹波コレクションの魅力ー」

会期：2004年4月17日（土）～5月9日（日）

会場：神奈川県立歴史博物館

問い合わせ：神奈川県立歴史博物館

（横浜市中区南仲通5-60 電話：045-201-0926）

○戸塚宿400周年記念企画展「東海道と戸塚宿」

会期：2004年4月10日（土）～5月16日（日）

会場：横浜市歴史博物館

【ミニ講座】

「東海道戸塚宿の成立について」

日時：4月24日（土） 11：00～

定員：30人（当日先着順 受付は30分前から）

参加料は無料ですが、企画展のチケットが必要です

【フロアレクチャー】

日時：4月24日（土）、5月8日（土）

問い合わせ：横浜市歴史博物館

（横浜市都筑区中川中央1-18-1 電話：045-912-7777）

○春季特別展「横浜ウマ物語 ー文明開化の蹄音ー」

会期：2004年3月13日（土）～5月23日（日）

会場：根岸競馬記念公苑 馬の博物館

問い合わせ：財団法人 馬事文化財団

根岸競馬記念公苑

（横浜市中区根岸台1-3 電話：045-662-7581）

2004年度 総会の案内

6月12日（土）14：00～17：00

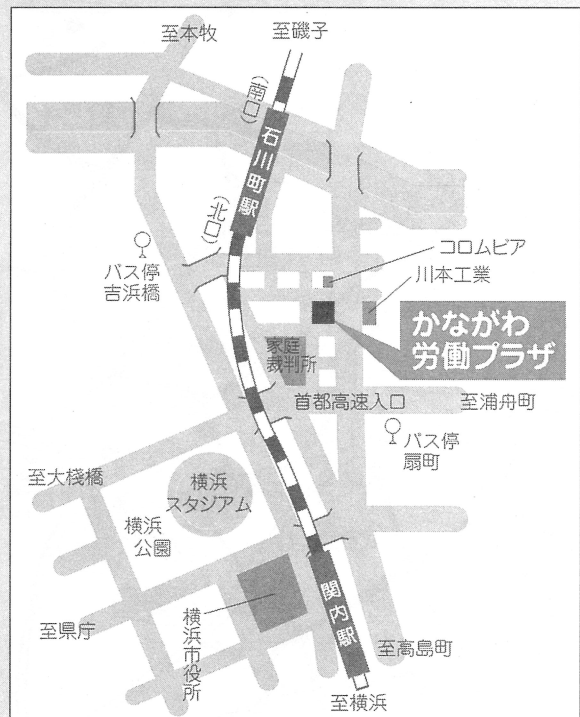
かながわ労働プラザ 3F 多目的ホールA
（石川町）

2004年考古トピック（講師未定）

急 告

来年度から、会員の方（該当年度の会費を納入している方）には会誌「考古論叢 神奈河」を無料で配布することになりました。詳細につきましては総会の場と次号の連絡紙上でお知らせいたします。どうぞふるって参加下さい。

● 案内図 ●



交通：JRご利用の方は、根岸線・石川町駅北口（横浜駅寄り）下車徒歩3分です。

考古かながわ 第29号

発行 神奈川県考古学会

発行日 2004年3月31日

編集者 秋田かな子・安藤文一・

河野真知郎・渡辺 務

印刷 (有)湘南グッド

発行者 神奈川県考古学会会長 寺田兼方

〒251-0043

藤沢市辻堂元町4-17-4 やよい荘102

郵便振替 00240-9-71208